

氏 名：藤 本 法 子
学 位 の 種 類：博士（看護学）
報 告 番 号：甲第109号
学 位 記 番 号：博第106号
学位授与年月日：令和5年3月15日
学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当
論 文 題 目：一人暮らしの高齢精神障害者にかかわる訪問看護師の経験：
対人関係の構築に焦点をあてて
Experiences of Visiting Nurses Caring for Older Adults with a Mental Disorder Living Alone:
Focusing on Building Relationships with Them
論 文 審 査 員：主査 江 本 リ ナ
副査 小 宮 敬 子（正研究指導教員）
副査 吉 田 みつ子（副研究指導教員）
副査 太 田 喜久子
副査 松 本 佳 子

論文審査の結果の要旨

審査の概要

日本社会全体に高齢化が進行するなか、精神障害を抱えた一人暮らしの高齢者の増加が予想されている。こうした人々は少なからず不安を抱えながら生活しており、地域の中でいかに支えていくのかは、喫緊の課題である。本研究は、一人暮らしの高齢精神障害者（以下、利用者）にかかわる訪問看護師の経験について、対人関係の構築に焦点を当てて明らかにしようとするものである。そこには、精神障害者へのケアでは、どのようにアプローチして関係を深めていくかといった対人関係の構築に専門性が問われており、その具体的な体験を明らかにすることにより、訪問看護師のケアの質を高めることになるのではないかという問題意識がある。

研究方法は、質的記述的研究デザインで、一人暮らしの高齢精神障害者を1年以上継続して訪問したことのある5名の訪問看護師（以下、参加者）に半構造化インタビューを行い、最も印象に残った患者の事例を中心に語ってもらった。分析は、インタビューの逐語録から利用者どう関係を築いてきたのかに注目し、参加者毎にテーマを抽出してストーリーを構成した。参加者の経験としては、訪問の初期には利用者への接近に難しさがあるものの、それぞれが独自の工夫をしながら関係を継続していること、病状悪化などの危機を乗り越えていくなかで関係を深め、ともに成長していく様相がリアリティを持って記述されていた。参加者は、利用者の苦境を理解するが故に、「何とかしてあげたい」という思いに駆られると同時に、何もできないという無力感に直面していたが、限られたなかでも可能な関わりを続けていくことに意味を見いだしていた。また、一人暮らしの高齢精神障害者にかかわる訪問看護師に固有な経験として、ソーシャルネットワークが乏しく受援行動が困難な利用者にとって、関係継続がキーポイントになること、一見、看護師の役割とはかけ離れたように見える多様な役割を取ることでそれ自体に、精神科領域の訪問看護の専門性があることが明らかになった。

審査の結果、本研究は、これまであまり探求されてこなかった、一人暮らしの高齢精神障害者にかかわる訪問看護師の経験を対人関係の構築に焦点化して探求したものであり、そのテーマは時宜を得たものであると評価された。また、申請者が研究参加者への丁寧なインタビューに基づいて豊富なデータを得ており、参加者が利用者の特性を踏まえて、細心の注意を払いながら熱心にケアしている様相を生き生きと記述している点も高く評価された。本研究で見いだされた、訪問看護師の多様な役割といった専門性や、参加者と利用者の間に生まれていたケアの互恵性という現象、訪問看護師のバーンアウト予防としての振り返りの重要性という知見は、新規性があり、実践へ広く還元できるものと評価された。

審査の結果、本論文は本学の審査基準を満たしていると判断し、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。